

Field manners

特集

今考える フィールドマナー

フィールドでのアクティビティの多様化や
便利な道具の登場などにより、昔はなかつ
たフィールドマナー問題を見聞きするよう
になりました。フィールドマナーも時代
によって変わるもの、変わらないも
のがあります。今回は、改めて自
然との付き合い方を考えてみます。
(まとめ：若林 輝／RIVER-WALK)

あなたのマナー、
見てますよ

スタートラインは
「人が自然に入る行為そのものが
影響を及ぼす」という共通認識

Field manners

フィールドマナー 考え方の基本

- ① 自然を傷つけない
- ② 人にもやさしく



つじむら ちひろ
辻村千尋
NACS-J保護部

NACS-J では大きく上のふたつに分けて、フィールドマナーを提唱しています。また、自然観察指導員講習会で紹介している『自然観察ハンドブック』には「ナチュラリストのためのフィールドマナー 10 カ条」(P274)を掲げ、啓発に努めています。

今号の特集では、これらのうち主に、自然を傷つけないためのフィールドマナーに重きを置いて、今改めて考えるためのヒントをまとめました。

おのおののマナーや、マナー違反によって起こっている問題を知ることとはとても大切なことですが、マナーはルールや規則ではありません。ひとりひとりが受け手となる「自然」の身になって考えることこそが重要なのです。

マナー問題が起こる理由とは？

フィールドマナーにおいて自然、もしくは他者との衝突が起きる要因って何だろう……。これは私自身がフィールドに出るときにいつも思っていることです。

少し前には犬連れ登山が話題になりました。「犬を連れての登山はマ

ナー違反ではないのか」「犬は家族の一員なんだからいいじゃないか」というやり取りが行われ、NACS-Jにも相談が持ちかけられました。その際に強く思ったことは、フィールドマナーは「自然環境の特性にに応じて変わるもの」ということです。例えば近所の公園で犬を連れてい

ても影響は少ないだろうと思うのですが、北アルプスの立山連峰に連れていったらどうなるのか。犬を見たことのないライチョウへの影響は？犬連れがすべてだめとは思いませんが、少なくとも国立公園の特別保護地区や特別地域などではだめなのではないか……。良い・悪いを論じる

には、まず受け手となる自然を知り、個々に考える必要があります。また、近ごろ話題のトレイルランニングについて、従来の登山者から「走ると土壌を削ってしまうからやめてほしい」という意見が出ます。一方でトレイルランニングをやる人からは「自分たちの履いている靴の

●ナチュラリストのためのフィールドマナー10カ条



フィールドマナーの基本を含め自然観察のノウハウが詰まった『フィールドガイドシリーズ①自然観察ハンドブック』(編集・監修 NACS-J)。

ナチュラリストのためのフィールドマナー 10 カ条
(詳しくは『自然観察ハンドブック』(P274) 参照)。

ソールは柔らかい。登山者のソールのほうが分厚くて硬いから影響がある」という意見が出ます。山という自然をお互いに楽しんでいる同士なのに、このような対立が生まれてしまうことが多々あります。

踏みつけ方やソールの硬さによって変わる部分もありますが、登山道に最も大きな影響を与えることは、踏み付けることによって土壌の浸透能を変えてしまうことだと科学的には言われています。土壌を踏み固めて本来持つ吸水作用を損なわせてしまい、大雨時などに登山道が水みちになり、その浸食作用が登山道を壊すのです。そうすると、登山もトレイルランニングもどちらもやめたほう



がいい、ということになります。

フィールドマナーは、あくまでも自然や人に配慮することであり、禁止事項を守ることはありません。ともすればマナー問題は「トレイルランニングはダメで登山はいい」などという単純な議論に終始しがちです。ですが、大切なことは行為のタイプによって影響があるかないかではなく、「人が自然に入る行為そのものが影響を及ぼす」という事実を改めて認め、共通認識を持つことです。皆がそのスタートラインに立てれば、自然への影響をどのように減らしていけるかをともに考えられるのではないのでしょうか。また、その地域に暮らす人たちとコミュニケーションもぜひ取ってください。地域の人への配慮はフィールドマナーを考える上でとても重要です。地域の人が持つ自然の情報を参考にすることで悪影響を回避できることもあります。

マナー違反を見かけても

ときには「注意しない」ことも必要

自然へのアクセスが容易になったり、道具が変化してきた昨今、それまで自然体験をしてこなかった人た

ちがフィールドに足を踏み入れる機会が増えています。自然に悪影響を与えている人もいるかもしれません。そういう場を目撃すると、どうにか止めたいと思う人も多いと思います。私は、そういう場合、例えば一緒にいる友人に「この〇〇、▲▲だから貴重なんだよ。踏まないよう気を付けて」などと自然の価値を話し、悪影響を与えている相手に直接言わない注意をしています。

直接注意をして逆ギレされたということは起こりがちです。これであればまだその場だけの話で済みますが、今のSNS時代、注意されたことが気に入らずSNSでこちらのことを投稿し拡散する、ということも起こります。こうなると、その場だけでなく後々も、そして自分だけでなく家族まで被害が及ぶ可能性も出てきます。自分たちの安全のため、ときには「注意をしない」、ということも選択肢のひとつとして持っていた方がいいと思っています。

子どものころからたくさん

自然と触れ合う機会を

昔は身近な所に空き地もたくさん



自然との付き合い方を肌で覚えらるる幼少時の自然体験はとても重要。

あり、自然の一部に触れ合う機会を子どもたちが持っていました。花摘みを楽しみながら、摘みすぎるとどうなってしまうのかも、おのずから学べたと思います。小さなころに身近な自然体験をすることで「あそこと比べてこの自然はどうなんだろう」と比較しながら個々のフィールドを考えていくことができるようになります。

フィールドに入ることへの影響を理解していく意味でも、川遊びや海遊び、山遊びなど、子どもの自然観察や自然体験を広めていくことをNACSJは大切にしていきたいと思っています。



バードウォッチングで問題となる 今時のフィールドマナー

Field manners

池のカモの観察風景。池の際まで行かずにカモが警戒しない距離を保っている。

バードウォッチングや野鳥の撮影で、近年問題となっているフィールドマナーについて、日本野鳥の会の富岡辰先さんにお聞きしました。

とみおかたつゆき
富岡辰先

日本野鳥の会事務局長兼普及室長。豊富なフィールド経験から野鳥と人とのより良い関係を探り提案し続ける。昨年は300種以上の鳥をウォッチ。



——野鳥観察におけるマナーについて
近年特に感じられていることはありますか？

デジタルカメラが普及した2010年ごろより、寄せられるマナー違反の数は増えていきますね。以前はバードウォッチングの延長に写真撮影がありましたが、今は撮影から入る人も多く、そのような人の中には鳥を「きれいな絵の対象」としてしか考えていない人もいます。生態も分からず鳥の保護も考えず、とにかくいい絵を撮れればいいという人が増えた印象があります。そのあたりから野鳥に関するマナー問題は増えています。2013年に行った支部

へのアンケートでは、70件ほどのトラブル事例が寄せられました。

——例えばどのようなものですか？

田んぼに珍しい鳥がいて、人が集まって畔^{あぜ}を崩してしまったとか。鳥を撮影するカメラマンの車で渋滞となり、そこで事故が起きてしまったとか。これらは主に人に対しての影響ですが、中にはあまりにも人が集まるので田んぼの所有者が鳥を追いつめてしまったという事例もあります。

——人にも鳥にも影響を与えてしまった例ですね。ほかに鳥に影響を与えてしまった例はどのようなものですか？

巣を撮影していたらひなが育つ前に巣立ってしまった事例もありますし、ヘロヘロになって渡って来た鳥を追いかけて回したりという事例もあります。大手新聞社主催の写真コンテストにマナーの悪い写真が載ってしまうこともあります。

——例えばどのような写真ですか？

オオヨシキリの巣の手前にあるヨシをかき分けて撮影した写真が入賞するということがありました。少し知識のある人が見たらすぐ分かるようなものだったのですが、選定する人が

鳥の知識を持たない写真家・芸術家であるとそのようなことも起こりうるのかな……と思います。

——最近SNSによる情報拡散も問題視されています。

SNSを通じて一カ所に人が集まりすぎて鳥に過剰なプレッシャーをかけたり、地域の方にご迷惑をかけるしまうことは年々増えていると思います。今年、ヘラシギが有明海に出たとき、情報の出回った翌日には200〜300人のバードウォッチャーが来てたといえますから、その拡散力がうかがえます。ただ、その場所、広大な干潟で人が集まっても問題ない場所でした。距離もあるのも鳥にも影響がありません。逆に全



野鳥公園など管理された公園では、珍しい鳥が出たときなどはレンジャーがロープを張る。

国からバードウォッチャーやカメラマンが集まることによって、地域にお金を落とす経済効果が大きく、よい例でもあったと考えています。ところがこれが私有地の田んぼとかになると、問題が起きてしまいます。場所によってケースバイケースですね。

——個々に違うということですね。

そうですね。野鳥公園などの有料施設であれば、レンジャーがマナーを守ってもらうよう管理することもできるでしょうし、田んぼの畦道なんかは私有地ですが、農家の方に声をかけることで気持ちよく観察できることも多いです。特に人とのマナーを考える上で大切なことは、ちゃんとコミュニケーションを取ることだと思います。

——ほかに近年、マナーについて思い当たることはありますか？

当会では、このところ各県の支部で行う探鳥会の参加者が増えているのですが、大人数で行動するので目立つんですね。周囲にいた方からマナーについてのご指摘をいただくことがあります。鳥を見せるのに一生懸命になって道をふさいでしまったり、ついつい説明に熱が入って柵の中

に足を踏み入れてしまったり。30人ぐらいから、大規模の公園では100人ほど集まったりもしますので。

——100人はすごいですね！バードウォッチング初心者の方もたくさん参加されると思うのですが、マナーの話もされるのでしょうか？

探鳥会の中でマナー普及をします。日本野鳥の会には「や・さ・し・い・き・も・ち」というマナーの基本項目がありますので（9ページ参照）、まずはそれをベースにして、観察しながら随時伝えていきます。例えば子どもが鳥のほうに走っていつちやったら「ダメだよ、鳥とはちゃんと距離を取って、逃げないような距離で観察するんだよ」とか、観察する公園までの道すがら「人家のある所では双眼鏡をのぞかないでくださいね」とか。あとは繁殖している鳥が、巣の近くで警戒音を出しているたら「これは警戒音ですから離れましょう」と説明したり、探鳥会を通して鳥との付き合い方やマナーを自然に学べるようにしています。

——多くのバードウォッチャーが、悪いと分からずにやってしまっているマナー違反ってありますか？



鳥に警戒させない距離を保つ努力もバードウォッチングの楽しみのひとつ。

やはり繁殖期に長く巣の近くにいてしまうことは、ついついやってしまいがちですね。また繁殖期以外でも鳥が警戒しているのに近づいていつてしまふとか。例えばカモやガンの仲間が一斉に首を上げている写真がありますが、そろって首を伸ばすのは警戒のポーズなんです。片目で人間を見て、片目で逃げる方を見ているんですね。ある程度バードウォッチングを重ねて知識を持てば、すぐに理解できる行動です。

基本的には鳥との距離をしっかりと取ってあげれば鳥への影響はありません。今は双眼鏡やカメラなどの機材もどんどん良くなっていますから、鳥がリラックスしている距離で、存分に観察や撮影を楽しんでください。

カメラの販売店がカメラ購入者を対象に野鳥の撮影講座を開いていた。講師が池のカモに餌をまき、カモを集めて参加者に撮影させていた。そこでさまざまな機能の説明をしていた。野鳥の生態を全く知らない初心者カメラマンは野鳥の撮影はこのように行うべきだと誤解してしまう。

日本野鳥の会の県支部より報告された
マナー違反の実録を紹介します
(※文意を変えずに一部文章を変更して
います)。

Field manners

野鳥観察の マナー違反実録& マナーの基本

狭い農道沿いでサバクヒタキが餌付けされ、人間を見るとすり寄るように現れるようになった。警戒心をなくしており、危惧したとおり、それを狙う猛禽に襲われ犠牲となった。

公共の池でカワセミが餌付けされている。留まり木の設置のみならず、餌用の魚を育てるイケスまでが設置され、イケスにはネットがかけられ餌の無断使用を禁止する看板も設置されている。

ヤマセミの巣の対岸正面の竹やぶを切り倒し、撮影スペースをつくり、ひなに食べものを運ぶヤマセミを撮影していた。切り取られたのは巣穴の真ん前であり、巣穴に入る直前、一度そこに留まる場所だった。そこが切り払われたため警戒心が強くなり、しばらく近寄れなかった模様。飛行ルートも変わった。

日本野鳥の会が広める野鳥観察のマナーの基本は

や・さ・し・い・
き・も・ち

- や 野外活動、無理なく楽しく
- さ 採集は控えて、自然はそのままに
- し 静かに、そーっと
- い 一本道、道からはずれないで
- き 気をつけよう、写真、給餌、人への迷惑
- も 持って帰ろう、思い出とゴミ
- ち 近づかないで、野鳥の巣

(詳しくは日本野鳥の会
「BIRD FAN」にて。
<https://www.birdfan.net/>)

キヤノンと共同で作成した
「野鳥撮影マナーブック」。



オシドリが例年 120 羽以上越冬して、散策する人やカメラマンが楽しみにしていた貯水池で、ひとりのカメラマンが堤防を降りて池の縁の茂みに潜りこんで一日中張り込むようになった。ほとんど毎日のように来るのでオシドリの姿が見えなくなった。

神社にあるフクロウの営巣木周辺に 30～40 人が三脚を立て、フクロウのひなを撮影していた。一日中撮影者は絶えない。巣は 20 m ほどの高さにあり地上から距離があるため繁殖の失敗はなかったが、参拝者が通る石畳の歩道にまで三脚が置かれていることもあり参拝者の迷惑になっている。巣立ち後に枝に移っているひなを狙い撮影者が近づくため、ひなが地面に落ちることもある。

ルリビタキの餌付けが常態化していた。ピンでミルワームを枝に刺し、飛び出くるところなどを撮っていた。ジョウビタキが餌を目当てにやってくると、石を投げて追い払っていた。

ヨシ原にやってくるコミミズクの撮影に、多いときは 150 人くらいが集まる。近くに留まらせるために土手に穴を掘り太い枝を立てている。土手に穴を掘ると水漏れの原因になるため管理している国土交通省の担当者は怒っていた。



海辺での観察会でのこと。 潮間帯の石をひっくり返すと……

まえ だ のぶゆき
前田修之さん

こんなことがありました。

ウニや貝、カニをたくさん見つけることができます。これに気付くと皆、次々に石をひっくり返していきます。特に子どもはカニを見つけると夢中で探し続けます。このときに注意をしていないと、石をひっくり返したまま次に行ってしまいます。

なぜいけないの？

ひっくり返された石の上になった面には、動けない生きものや、突然陽にさらされ急いで石の下に移動しようとする小さな生きものがたくさんいます。そんな石の下に隠れていた生きものたちへの影響を少なくしなければなりません。

➤ どう声かけしたらいい？

「ひっくり返した石は必ず元に戻しましょう」とだけ言うのではなく、これらの生きものを観察し、どういう暮らしをしているかを説明した後、「だから、そっと戻してあげようね」と話すようにしています。

自然観察
指導員講師に
聞いた

なぜダメ？ どうする？ 守るべき理由と声かけのヒント

マナーはルールや規則ではありません。
だから守ってもらうにも工夫が必要。
経験豊富な自然観察指導員講師の方々に
マナー違反の理由と声かけのヒントを聞きました。

Field manners

こんなことがありました。

目的の野鳥をさえずり音声で呼び寄せて撮影する人がいました。近年、野鳥撮影のみを志向するアマチュアカメラマンが増えていて、撮影時のマナー問題が多発しています。

なぜいけないの？

野鳥の生態をかく乱し、繁殖などに悪影響を及ぼしかねません。音声による誘引は、鳥の生態に精通し、影響の範囲を把握した研究者やガイドが行うものなら是認できる場合もあると思いますが、生態をよく知らないカメラマンが趣味で行うことは避けるべきだと思います。

➤ どう声かけしたらいい？

まずは「すみませんが、さえずりの録音を流して野鳥を誘引するのはやめていただけないでしょうか」と声をかけます。「なぜいけないの？」と言われたら「野鳥の生態をかく乱するおそれがあるからです」と説明します。「何の権限でそんなことを言うのか！」と言われたら「法的な根拠や権限があるわけではありませんが、自然を愛する人のマナーとしてのお願いです」と伝えてみるのはいかがでしょうか。

繁殖期に録音テープの さえずり音声を流し……

さとうひとし
佐藤仁志さん



国定公園の湿原で 咲いている……

ふし み まさる
 伏見 勝さん



こんなことがありました。

ウメバチソウ、モウセンゴケなどの写真を、
 木道を降りて撮っていました。

なぜいけないの？

撮影しながら花の咲いていない植物（アサマフウ
 ロウ、シモツケソウなど）を踏み付けていました。
 またミズゴケをたびたび踏み付けることにより湿
 原環境を壊してしまう恐れもあります。

どう声かけたらいい？

ほとんどの人は湿原のしくみや生態に気付かずに入
 入しているので、いきなり注意する言葉はかずに、
 まずは「いい写真が撮れていますか？」と声をかけ、
 その場で葉っぱやミズゴケを観るミニ観察会をゲリ
 ラ的に行うようにしています。ただのうるさい人に見
 えてしまそうですが、腕章をしていると「自然観察
 指導員」という者に興味をもって聞いてもらえてい
 るようです。

秋になると隣の市から 毎日のように……

ちよっ き はじめ
 一寸木 肇さん

こんなことがありました。

ナラタケを採りにくるおばあさんがいました。散策路のあ
 る私有地に勝手に入り込み、散策路を外れたところにま
 で足を踏み入れて根こそぎ取ってってしまうのです。

なぜいけないの？

私有地のきのこを勝手に採っていくことはマナー以前の禁止
 行為。自然に対する影響としては、道から外れて茂みに立ち
 入っていくため、イノシシよりも始末が悪いくらいに草をなぎ
 倒してしまいます。ナラタケはもちろん、周囲の草木が
 折られてしまうことも問題です。

どう声かけたらいい？

承知の上でマナー違反をしている人には、あえて声か
 けはせずに、しかるべき管理者や警察に連絡するとい
 う対処もありだと思います。自然観察会を開いていると
 きに問題の場面に遭遇することもあるかもしれません。
 観察会には自分だけでなく参加者がいますので、参加
 者の安全を最優先に考えるべきだと思います。



身近になった
無人航空機

ドローン撮影の フィールドマナー

Field manners

これまで見たことのない鳥獣撮影やフィールド調査で目覚ましい活躍を見せるドローン。まさに今、ルールやマナーづくりが進められているさなか、実際に調査に活用し成果を上げている「流域の自然を考えるネットワーク」の稗田一俊さんに、ドローンで意識すべきマナーについて教えてもらいました。

ひえだ かずとし
稗田一俊

カメラマン。サケやサクラマス、クマゲラ、ヒグマなどを撮影。川魚の繁殖のしくみを妨げるダム建設の見直しや撤去、スリット化を求めて活動を続けている。



活躍の幅を広げるドローン。安全に活用するために必要なマナーとは？

私たち「流域の自然を考えるネットワーク」では、河川に設けられた中小のダム（治山ダム・砂防ダムなど）の現地調査を行っています。ダムが山裾崩壊や河岸崩壊を発生させ、土砂災害を引き起こし、サケ・サクラマスやウニ・アワビ・海藻などの水産資源を減少させ、多様な河川環境を損なっているという視点から、ダム建設の見直しや既設のダムの撤去もしくは改善（スリット化）を求める活動をしています。

従来の現地調査では日数と労力を要していましたが、ドローン（無人航空機）の導入により作業効率には格段に高くなりました。20分間ほどの一回のフライト（高度120m前後）でダムの上・下流の全容を記録でき、流域環境がつかめるようになったのです。

また、泥水の発生源や、それが沿岸に広がる動向や磯焼けの状況も知ることができるようになりました。さらに魚道の効果調査、河川や沿岸の魚類調査、流域・山野の鳥類調査などで幅広く活用しています。

このように自然の事象を調査する上でドローンはとても有効ですが、いく

つか気を付けなければならないことがあります。

まず、ドローンの飛行には航空法などさまざまな法的な規制があり、罰則も厳しくなっています。国土交通省や警視庁のウェブサイトで確認し、実際のフライトでは該当する各自自治体に確認するほか、国立公園は環境省地方環境事務所に、国定公園は都道府県に、国有林は各森林管理署など土地の管理者・所有者に、それぞれ確認・許可を仰ぐなど手続きを踏む必要があります。その上で守るべきフィールドマナーについて、以下に紹介します。

鳥たちの接近に注意。 相手の意図をくんだ配慮を

これまでドローンの飛行中、カラスやトビ、ノスリ、ミサゴなどが接近したことがあります。鳥たちが接近するのにはそれなりの目的や理由が必ずありますので、そこを読み取りながら回避することが必要です。例えば、トビやノスリ、ミサゴでは、繁殖を控えた時期や繁殖期には縄張りを持ちますので、ドローンに接近して、何者かを確認し、なかなか離れようとしないうことがあります。そんなときは彼らの意



(上) 上空からの撮影により、ダムの下流は砂利が失われ、河床低下が進行していることが分かる。(下) 産卵湖上中のウグイ。難所の滝を乗り切る道筋が分かってくる。



ガンカモ類調査のための ドローン活用ガイドラインを作成

日本に飛来するガン、カモ、ハクチョウのモニタリングにドローンが有効活用されています。一方でドローンがガンカモ類に及ぼす負の影響や予見できないリスクについては、これまで十分に考慮されてはいませんでした。

この3月、宮城県栗原市の「宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団」が「ドローンを活用したガンカモ類調査ガイドライン」を作成しました。

当ガイドラインは、野生動物への負の影響やリスクを低減しながらドローンを用いたモニタリングを可能とするため、ガンカモ類を対象にドローンによる接近実験をはじめとするさまざまな実験を行い、その結果に基づき、鳥類、特にガンカモ類にできるだけ影響を与えずにドローンをモニタリングに活用する方法をまとめたものです。

今回のガイドライン作成の取り組みは、あいまいだったドローン飛行における野生動物への影響を数値化した一例と言えるでしょう。

「ドローンを活用したガンカモ類調査ガイドライン」
http://www.izunuma.org/pdf/drone_guideline.pdf

図をくみ、ドローンをその場（縄張り）から遠ざけて、速やかに着陸させるようにしています。ユーチューブにはドローンが攻撃を受けて墜落する映像もありますので、特に気を付けなければなりません。また、カラスは好奇心があり、繁殖期以外でもドローンに接近してちょっかいを出そうとするので注意が必要です。羽を休める水鳥たちに接近して飛ばしたり、驚かしたり、その結果として営巣を放棄させる

など、生きものたちの暮らしをかく乱させるような飛行も避けなければなりません。またスタッフを含め、人にケガをさせない、迷惑をかけない、プライバシーを侵害しないように気を配る必要があります。常に墜落やノーコントロールになることを想定し、家屋の上空を横切らず、高速道路・鉄道や交通量の多い道路付近も避けています。また、撮影した映像や写真の公表ではプライバ

シーの侵害にならないようモザイクなど画像処理を施す必要もあるでしょう。土地の所有者や管理者とのトラブルもよく耳にしますので、私は飛行前に承諾を得るようにしています。

公表が前提の撮影には

事前の手続きとマナー確認が必須

ドローンで撮影した映像や写真は公表が前提ですから、手順を踏み、手続きを経た上で撮影することが大切です。

す。また動物の暮らしをかく乱するような撮影手法は避け、保全の意味からも希少種・貴重種の生息場所が分かるような映像・写真の公表は避けるようにしています。

超低価格で手軽に、しかも見たい位置に簡単にカメラを移動させて空撮できるドローンは、自然保護活動にもとても役立つツールです。ルールとマナーを守り、大いに活用していただきたいと思っています。

常に意識する自然への影響

「釣り」から 考える自然への インパクトとマナー



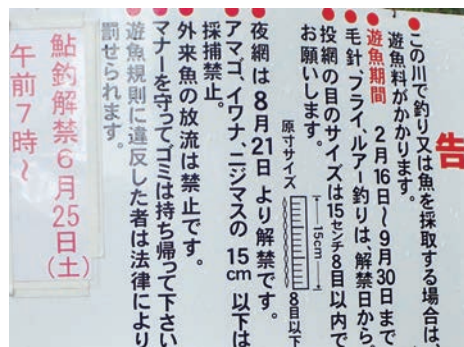
わかばやし てる
若林 輝

溪流釣りの本『RIVER-WALK』編集長。釣りをはじめ自然分野の編集・ライティングを行う。釣りは川から海から池や沼まで何でも好き。

釣りは、観るだけのバードウォッチングや自然観察、動植物や風景の写真撮影などにはない「採取」という直接的な影響を自然に与える遊びです。釣れば当然魚は減るし、漁獲圧が過ぎればその水域の個体群にとって致命的な影響も及ぼします。それを防ぐために水域ごとに尾数制限や体長制限、禁漁区や禁漁期の設定など、影響を制限す

るためのルールが遊漁規則や漁業調整規則などによって定められています。

では、すべての釣りが人が定められたルールを守っていれば問題はないのかと言え、そうでもなく、とくに閉鎖的な水域では人が集中して押し寄せ日常的に強い釣獲圧をかけ続けることで、生息していた魚がほとんど絶えてしまうということも起こります。なかでも溪流釣りは、そこにすむイワナやヤマメといった溪流魚への影響が常に指摘されている釣りです。最悪の場合は個体群の絶滅というケースも考えられます。もちろんそうならないために、その川を管理する漁業協同組合は遊漁料を徴収する代わりに遊漁対象魚種を増殖する義務を負っていますが、十分に対応しきれていない川ばかりではありません。北海道には漁協のない川もたくさんあります。だとすれば、どうしたらよいのか？ その答えのひとつが、マナーを意識することだと考えています。例えば尾数制限以内でも必要以上は持ち帰らない、キャッチ&リリースする、魚の扱いは丁寧に行う、など。また、人によっては傷の少ないシングルバーブレスフック（カエシのない一本かぎ）を使う、逃がす魚は水から出さな



川ごとに定められたルール。マナー以前に守らなければならない決まりだ。

い、持ち帰りは一日一匹にするなどを自らに課す人もいます。まず定められたルールを守り、さらに自然に与える影響を減らすために自分にできることをマナーとして実践する。このことが、特に溪流釣りなど、閉鎖水域で遊ぶ釣り人には問われている気がします。

SNSがフィールドマナーに さまざまな影響を与える

フェイスブックやツイッターなどのSNSには釣り人同士によるマナーの相違をめぐってのやりとりが度々見られます。写真を見て「魚の扱いが悪い」「この場所をさすな」など。ルール違反すれば反モラルといった極端な例はさておき、大部分のそれは相手の意見もくんだ上で個人個人が自ら判

断すべきことだと思いますが、多くの人がマナーに関するやり取りを目にすることで、マナーを考えるきっかけになっていることはSNSによる恩恵ではないでしょうか。一方、人同士のマナーという面では、配慮が足らない面も多々見受けられますが……。

今忍び寄る溪流環境への脅威。

ミズワタクチビルケイソウ

マナーという話に納まりきれぬものではないませんが、今、溪流域やアユ釣り場においてミズワタクチビルケイソウという外来珪藻が問題になり始めています。河川生物研究所が昨年、水生昆虫談話会緊急報告として発表した

「外来珪藻ミズワタクチビルケイソウ拡大防止のお願い」によると、ミズワタクチビルケイソウとはアメリカ北西部の固有種であり、日本で最も古い記録は2006年に筑後川のアユ胃内容物から確認したものとのこと。細胞1個体は130〜360μmですが、殻の一端から粘液柄（ひも状の粘液性物質）を分泌し樹枝状の群体に発達して、これが汚水の中に見られる細菌のミズワタとそっくりになるそうです。

小さな群体は見づらいものの、増殖すると石の表面をぬるぬるとマット状に厚く覆い、河床全体が茶色く見えるようになります。多くの場合、晩春に水温の上昇に伴って全体が膨れミズワ



濡れたシューズやウエーダーは使用後にしっかり乾かしたい。

タに似た感じになるとのことです。

2018年までに長崎県を除く九州6県および新潟・長野・静岡・山梨・神奈川・東京・埼玉・群馬・栃木・福島で確認され、群馬・長野・山梨で水産試験場が対策に乗り出しました。この3月に山梨県水産技術センターが「ミズワタクチビルケイソウが放流アユの定着に与える影響」という報告書を発表しました。

実際にミズワタクチビルケイソウを溪流域で見つけて解析を進める九州大学にサンプルを送ったという釣り人によると、まだ未知なる部分が多く、分布域についても今後さらに明らかにされていくだろうとのこと。また、一度、河川に侵入すると微細な珪藻のため根絶は極めて難しいとのこと。

釣り人にできることは何かと聞いたところ、ある川で使ったシューズやウエーダー（胴長）を別の川で使用する際には、しっかりと乾燥させることだそうです。ニュージラランドでは

デイデイモという外来珪藻が問題となり、乾きにくいフェルトソールのウエーディングシューズが使用禁止となった例もあります。ただ、分布の拡大経路も被害状況もまだ明らかにされていない状況です。また、乾きにくいのはフェルトソールだけでなく、一概にこれがだめと決めつけて不正確な情報を広めてしまうことは、かえって問題への思考停止状態を招いてしまうこともあるため注意が必要です。いずれにせよ、これもまた人が自然に影響を与えている事実のひとつ。今後の正しい科学的知識に基づいたルールの設定やマナーの啓発が待たれます。

水辺で遊びながら水辺の監視人でありたい

私自身、溪流釣りを深く愛好するひとりで。緑のトンネルをくぐり清冽な流れにつかりながら美しい渓魚とたわむれる遊びはとても魅力的で、ほかに替えの効かないものです。末永くこの釣りを続けていきたいと願っています。そうあるために自分にできるフィードマナーとは何か、正しい情報をキャッチして、常にアップデートしていきたいと考えています。



(上) ミズワタクチビルケイソウの顕微鏡写真。
(下) ミズワタに似た状態の群体。
(写真：河川生物研究所)

無意識に使ってしまう

人間本位の言葉

フィールドマナーを考える上で、私が今一度皆さんに考えてほしいと思っているのは、自分たちが使う言葉によって、無意識に自然に対して人間の都合を押しつけているということです。メディアも含め、多くの方が大きな思い違いをしていると思います。

例えば野生の鳥や生きものが「餌を捕る」「採餌する」という表現が多くありますが、これは間違い。辞書を引くと、餌は「人が与える物」と書いてあります。野生動物が捕っているのは人が与えている物ではなく自分で捕食・採食しているものですから、餌ではなく正しくは「食物」です。用例には「餌付け」とありますが、これは「餌に付ける」こと。つまり鳥などの野生動物を人間の餌に慣らせる、人間本位のかかわりのことです。このように、野生動物に対して「餌」という言葉を使うことは、言葉の上でも彼らに干渉していることになるわけです。

また「採集」という言葉は「採取」「収集」というふたつの言葉が組み合わさってできています。採取すること

何気なく使っている言葉から考える

Field manners

マナーに通じる 自然のとらえ方



おがわらたかお
小川原孝生

株式会社生態計画研究所所長。東京港野鳥公園など、自然に親しめる公園づくりを提案・指揮。生きものと人との共生社会の実現を目的とした活動を続ける。

自然に影響を与えないよう「自然＝生きものの身になる」ことは、フィールドマナーとして重要です。生きものの身になるにはどうしたらいいのでしょうか？ 自然との向き合い方を改めて考えます。

猛禽のノスリは
本当に天空の「支配者」なの？



Field manners

自体は生きものとして絶対に必要なことです。いろんな命を採取し、摂取して我々は生きています。ただ、それを収集すると人間本位の経済価値が生まれます。それが採集です。自然に大きな影響を与えてしまうのは採取ではなく採集です。しかし人間の行動も、生きものとしては「採取」とすべきところを、多くの場合、深く考えずに「採集」が使われています。

先日のテレビ番組では「南硫黄島ではカニが王者として君臨している」というナレーションがありました。「生態系の頂点にいる」ならいいでしょう。

でも「王者」は違うと思います。同様に猛禽が空を飛んでいると、すぐ「天空の支配者が」というナレーションが流れます。どこが「支配者」なのでしょう。逆に多くの生きものに生かされている存在なのに。

生きものの「生き残り戦略」という表現も気になります。「戦略」を辞書で引くと「戦争のための計画」とあります。我々は無意識のうちに戦争用語を使わされてしまっているわけです。しかも、生きものは「戦略を立てて」生きているのでしょうか？ 同じく「競争」という言葉も頻繁に使われます。「繁殖

期に見られる雄同士の競争」など。雌を求めて競ったり、せめぎ合っていると思いますが、それは、人間でいうところの「争い」なのでしょうか。さらにドーキンスという学者は、ドンダリとゾウムシのせめぎ合いを「進化的軍拡競争」と呼び、今や多くの研究者がこの言葉を踏襲しています。

今回例を挙げた言葉はすべて人間本位の言葉です。人間が自然や生きものを人間の物差しに当てはめてしまったら、もっと言うと、人間が自然や生きものよりも上位にいる意識から生じた言葉と言えないのでしょうか。

「じねん」という言葉

天然というのは本来、そのままの状態です。自立して世代交代できる、そういう状態を言います。一方で自然（じねん）という言葉はナチュラルな状態を指していますから、例えば人の手が加わった環境も、目の前の「あるがままの姿」ですから自然（じねん）なわけです。日本人は、その区別が本質的に難しい民族なのかもしれません。



Fieldmanners

雑木林は……?

科学的リテラシーを高め、
自然のとらえ方を考える

科学的リテラシーの向上や



Field manners

野生のニホンザル
に「ボス」はいる
のか？

17